

棄兒の三藏

倉石武四郎

三藏法師玄奘が取經の成功は、當に佛教徒のみならず、一般の支那民衆からも奇蹟と謠はれ、彼の名は佛門の一隅に沈む事なしに、民族の大きな胸に波立つた。従て其の取經を中心に發達した傳説には種々の分子が加味され、三藏は固より、佛教をも更に緣故のない物語が豊富に傳會された。民族的英雄としての崇拜から民族の有する善美を擧げて彼に捧げるのは固より其の所であるが、其の極に至つては、却て最負の曳き倒しに類して彼自身をして苦笑せしむべき危険をも伴ふ。取經傳説の集大成たる明の西遊記に現はれた

三藏棄兒の一齣は、固より唐の慈恩寺三藏法師傳などには臭もなかつた處で、三藏にして知るこゝあらば迷惑至極だと思ふかも知れぬ程の突飛さを持つて居る。三藏には迷惑かも知れないが、かくして傳會された徑路を研究することは、却て民族研究上興味のあることで、亦以て三藏の偉大なる潛勢力を髣髴せしめ得よう

と思ふ。

事實慈恩傳に見える三藏が少年時代の逸話はあまりに平凡である。左の腋を破つても居らず、日輪が懐に入つたらしくも無い。英雄につきもの、神怪な傳説が一向見當らないのは誠に同情に價する。偶々此の同情心が縁を持つた棄兒物語の發端は、太平廣記卷一百二十に見える陳義郎といふ少年の話がそれである。われわれは少しく三藏をさし擱いて此の少年の因縁を辿らねばならぬ。

物語は唐の玄宗が天寶年間とある。陳彝爽といふ人が蓬州儀隴の令に任官し、其の妻郭氏と二つになる義郎といふ兒を伴うて出發した。彝爽の母親は年老いて郷里を去るこゝを好まぬので、一人淋しく後に残つた。出發に臨み郭氏は衫子を仕立て、姑に贈らうとして、急ぎのあまり誤まつて缺で指を傷け、血痕が衫子に滲んだ。しかし此も却て何かの記念と血染のまゝで

進上しておいた。途中を氣遣うて親子三人の外に親友の周茂方を頼んで同行して貰つた。然るに茂方は縣令の官に郭氏の美に心を眩ませ、葬爽を入なき處に誘うて、懸崖から擠き落した。そして「葬爽の馬が跳つた爲だ」云偽はつて號哭し、加之甘言を以て自分が葬爽の名を騙つて赴任するの利を説きつけた、郭氏は後になつて漸く其の奸計を覺つたが、今更致し方もなく假の陳葬爽に伴つて各地を轉任して回つた。覺えず十七年の歲月が流れて、義郎も十九歳に成人し、都に出て進士の試験に應ずることになつた。都からの歸途ある邑を通過した處が、飯を鬻ぐ媪さんが頻に歡待し、而かも價を受取らぬ。譯を尋ねるに「お前さんの姿を見るに私の孫をつくりで」云つて、涙ながらに簞笥から血染の衫子をこり出して錢別した。何も知らぬ義郎は之を携へて家に歸つた處、母の驚きは一方でなく、詳しく所由を問ひたした。果してその邑は故郷で、其の媪さんは義郎の祖母であることが知れ、實父が非業の最期も初めて打ち明けられた。義郎は大に憤つて霜刃を研ぎ澄まし、茂方の寢込みを襲うて仇を復し、遂に相伴うて故郷に姑を訪ね、懇に孝養をつくした云ふ。

此の物語は支那文學によく現はれる忍辱報仇傳説の

先鋒を承はるもので、此れ以後戯曲や小説にかゝる種類の物語が屢々見えて居る中でも最も著名であり、而かも翻案の跡歴然たるものは古今雜劇や元曲選に見える相國寺公孫合汗衫雜劇である。元の南京でも金獅子張員外と謠はれた富豪の張義と其の妻趙氏、一人息子の張孝友と媳婦の李玉娥、かう云ふ家族が極めて平和に暮してゐた。孝友は慈悲深いあまり尾羽打ち枯した惡漢陳虎を救濟して、之に店の手傳をさせておいた。その頃丁度李玉娥が懷妊して十八箇月まで生れないので心配で堪らぬのに乗じて、此の陳虎が惡計を企らみ若夫婦を誘つて東嶽廟へトなひに出かけさせた。出發に臨み、老夫婦があまりに諫止するので、孝友の汗衫を二つに剪み切り、指を咬んだ血汐を染めて紀念に相願つた。果して黄河の渡船で陳虎は孝友を水中に突き落し、李玉娥を拐かし去つた。腹の兒が生れてから早くも十八年姓も陳氏を冒して陳豹と稱した。膂力が人に過ぎた處から武舉に應じて狀元及第し、南京提察使に任ぜられた。一方張員外は火災で財寶を蕩盡する、頼りに思ふ若夫婦の行衛は知れず、乞食同様に零落してしまつて居た。初め陳豹が南京に赴任する時、母が例の汗衫を渡して、之を證據に張員外と云ふ人を訪ねよ」云と命じておいた。然し此の有様では見當る譯も

ない。ある時相國寺に散歩して不圖纏纒を纏うた老夫婦の乞食を見て、非常に憐れに思ひ、懷中離さぬ汗衫を與へて「衣服の補ひにもせよ」云つた。夫婦は大に驚いて此も肌身離さぬ汗衫をこり出して合はせるこ、寸分違はぬ。尋ねる張員外のなれの果てこは初めて知れた。それから母親に問ひ質して、父と思つた陳虎が却て實の父の讐こ知れ、遂に之を擒にして梟首する。一方河中に擲け込まれた張孝友も幸に漁船に救はれて命を完うし、こある寺に出家の身こなつて居た。そこへ亡父の靈を祀らうこ回向に來た豹を始め、その母や祖父母がすべて落ち合つて夢かこばかり驚喜する所で幕になる。

此のよく類似した合汗衫こ陳義郎この間にも自ら極めて重要な相違の點あるこを見逃がすわけには行かぬ。陳義郎の父は斷崖から墜死して居るが、張孝友は直に漁船に救はれた。前者は實話こいふ程自然に出來てゐるが、後者の如く親のあるのに故郷へも歸らずをめぐり頭を丸めて見たり、一家眷族が最後に偶然に遭會したりする所は、頗る不自然である。尤もかゝる大團圓は支那文學の特色の一になつて居る程支那人の性質に適合したもので、大抵な悲劇も發展に連れて喜劇化するこは殆んどお定まりである。此もつまり死

んで居るに違ひない夫なり父なりを最後に復活させねばならぬこ云ふ責任から、かう云ふ不自然な逕路が醸されたのである。故にこの二つの物語の間に如何なる媒介物が入らうこも、合汗衫の傳説は當然陳義郎の系統を承けたものこ云はねばならぬ。そして問題の棄兒を引き出す爲には更に第三の物語を必要とする。

第三の物語は陳光蓋江流和尚こ云ふ名の戯曲である此の劇は明の戯作者徐文長の南詞叙録に宋元舊篇として擧げられた六十種ばかりの劇本の一になる。而かも其の中でも殆んど筆頭に載せてある處を見るこ、餘程古い緣故のあるものらしく想像される。然し南詞叙録はたゞ名稱だけを擧げたに過ぎず、又今日まで此の劇の完本が傳はつて居るこも聞き及ばぬ。別に明の沈璟の輯めた南九宮譜に陳光蓋又は江流の名の下に十九の零曲、清の莊親王の編した九宮大成南北宮詞譜に十二のこれも零曲就中十四曲だけは南九宮譜と重複するが徵引されて居るが打ち見た處南戲の體格が爛熟して居る如くであるから、直に徐文長の所謂陳光蓋江流和尚其のものであるこは斷じ難い。確な話こしては、沈璟が榮えた萬曆の頃までに宋元が系統を引いたこ傳へられる程此の名の戯曲が作者の間に重んぜられて居たこ云ふこに過ぎない。

所で此の零曲を拾ひ合せて見るに、(一)兒子が科擧を受けに去つた後の母の淋しさ(二)進士に及第して間もなく結婚し刺史に任官される得意(三)郷里から任地に出發する送別離意(四)後に残つた母の口説(五)赴任途上の景色(六)夫妻の心配事を老漢か立ち聽きする所(七)壯士に襲はれて之に抵抗したが叶はず懷妊の妻を老いた母を案じ乍ら水に投ずる嘆き(八)窶家の催す宴會の騒を耳にする憤恨(九)漸く生み落した赤兒か又もや殺されんとするの憂傷(一〇)龍神ミ遷安ミの力で一家が大團圓の樂を享ける處、こんな場面が無秩序に現はれて來る。就中注意すべきことは、主人公の陳光蓋が龍神ミ云ふ超人間的の力によつて例の大團圓を結ぶ仕組で、合汗衫の張孝友か漁船に救はれて出家したものとは、いはゞ百尺竿頭一步を進め、よほぎ筋にしても洗練され、物語として神話化した趣が見える。又佛敎ミの關係も極めて著明となり、外題からして「和尚」の字面を用ひたり進んでは遷安が働いたり、到底孝友が剃髮した位の生温かさでは濟まなくなつて來た。處で御待ち兼ねの捨兒はミ云へば、生憎にもおあつらへ向きミ云ふ程の曲が引かれてない。たゞ

(轉山子)夢叶麒麟應佳兆。又添我無聊。纔離了十月懷胎。又恐惹一場煩惱。戰兢々度日。算吉凶難保

麒麟の夢の目出度きに、愁の雲はさし添ふる。
久しの懷胎免かれて、又來む、煩惱如何ならん。
夜毎夜毎に寝もやらず、吉ミ凶ミを計り兼ね。

(紅芍藥)負屈與銜冤。蒼天也知道。閃的我撲撲簞簞淚痕交。尋思痛苦咽倒。算來算來此事難恕饒。拔刀處斷不入鞘。儂如今一心待殺小兒曹。拚得箇人恐也聲高。

虐けられし我が身をば、神も哀れミ覺さずや。
ほろり／＼ミ散る涙、積る思にむせびつつ。

あな憎らしの刃やな、血に饑ゑたるか鞘走る。

我兒の生命(いのち)ミりたくば、喚きたてなむ怨みんず。

の二曲の憂悶ミ、

(要鮑老)憶昔銜冤并負屈。豈想道重歡會。姦雄空使

牢籠計。瞞不過鬼神知。那時若沒龍神救。怎能勾有

今日。若還不遇遷安的。也葬在魚腹内。以下畧之

昔しの嘆き夢ミ消え、思ひもよらぬ哀かな。

さかしらだてる計(たくみ)をも、破りたまふか神佛。

若し龍神の救はでは、此の喜も何時か見む。

遷安ミの間に遭はざれば、魚の腹をば肥してむ。

の歡喜ミの間に、何事か生れ兒の上に事件の起つて居るこゝだけは推察し得る。

此推察を現實にする材料として愈々吳承恩の西遊記

を引き出さねばならなくなつて來た。海州の陳尊字は光蕊が進士の試に應じて狀元に及第し、意氣揚々として長安の街を廻つて居る中に、宰相殷開山の娘温嬌の目にさまり遂に入贅する後間もなく江洲に赴任するこゝになつたので、妻を携へて洪江の渡しにさしかゝつた。船頭劉洪が夫人殷氏の美貌を見て悪心を起し、遂に陳光蕊を水中に投げ込み、其の衣冠を着け、殷氏を擁して堂々江洲に赴任した。江洲に入つてから殷氏は遺腹の子を生み落したが、劉洪に逼られて、已むなく江中に投ずるこゝに決心した。そこで衫子に包み、血書の因縁がきを添へ、木板に縛りつけて推し流した。流れた板は金山寺の籠で止まつた。金山寺の長老法明和尚が之を發見して養ひ上げた。序で乍ら面白いのは拾ひ手の和尚様で、江流記には遷安の名が見えた外、此は法明となり、傳奇彙考に見える北西遊の劇では丹霞禪師となつてゐる。遷安のこゝは詳でないが、法明和尚は唐の中宗頃例の化胡經問題を論じた江陵府の名僧であり、丹霞禪師は鄧州の人、江西馬祖及び南嶽石頭の弟子で、唐の徳順憲穆諸帝の代に相當する。何れも立契の榮えた太宗の時代はすつと後で、要するに唐代江南の名僧の中から借用したに過ぎないのである。さて其の棄兒はその出身に因んで江流名けられ、十

八歳になつて立契云ふ法名を與へられた。才識拔群で少年ながらに先輩の酒肉和尚を凹ますので、その和尚が怒つて「棄兒の親無し奴」罵つた。立契は大に驚いて法明和尚に哀告して父母の姓名を聞かして貰はうとした。そこで和尚が初めて血書と汗衫を彼に示し母を尋ねに出かけさせた。母子再會の上殷開山から奏聞して遂に劉洪を捕縛し其の生肝を剝つて光蕊を祀つた。するこゝれまで龍王の宮殿に置まはれて居た陳光蕊が水底から浮び出て蘇生し、一家は團圓の會を開いて慶賀する。立契が都に出て取經の因縁を聞くのは、これからの事になつて居る。

扱て此の物語を曩の江流記と對照するならば、彼處で了解に苦しんだあまたの關節も、自ら刃を迎へて解けてしまふ。全然別人に關する物語がかく迄多くの類似性を持つこゝは不可能であるこゝいふ前提の下に、私は江流記を以て立契棄兒の物語を演じたものと認めて憚らない。

處で西遊記そのものも決して吳承恩によつて一時に結撰されたものではなく、古くは南宋の講談本でも見える唐三藏取經詩話云ふものに已に體格だけは生じて居る。此の中には勿論三藏棄兒の話はないが、面白いこゝには其の逆に立契が水死せんとした小兒を救

つた一條が載つて居る。それは到陝西王長者妻殺兒處第十三の章で、西域から歸つた玄奘の一行が河中府にさしかゝつた時の話。河中府の王長者が商用で旅行中其の後妻の孟氏が繼子の癡那を殺さうと謀り、鍋で煮たり、舌を抜いたり、飯を與へなかつたり、さまざまの悪計を施したが、これも成功せず、遂に樓上から満々たる江水に向つて突き落した。長者が歸つての歎きは一方ならず、丁度通りかゝりの三藏法師等を請じて供養した。其の時法師と猴行者とは少しも齋を食はないので、怪しんで之を問ふと、「酒が過ぎて飯は欲しくない、たゞ魚羹なら」と云ふ。長者は早速百斤もある大魚を買ひ求めて法師に奉る。法師は直に刀を執つて其の魚を二分した所が、中から癡那が飛び出したと云ふ筋で、木魚の出來たのはそれからだと言き添へてある。降て金の院本名目に唐三藏といふ名があり、

元の録鬼簿には吳昌齡の唐三藏西天取經といふ雜劇の名が見える。前者は勿論後世に傳はらぬが、後者に就ては納書楹曲譜に引かれた西遊記の套數がその零本であるといふ説がある。納書楹曲譜に引かれた西遊記は之より先き例の九宮大成南北宮詞譜の所々にも相出入して引かれ、其の筋書は北西遊として抄本傳奇彙考に見えて居る。詳しく之を研究するに、さうもそんなに

古いものではなくて、吳承恩西遊記あつてのものらしく想像される。尤も南詞叙錄本朝の末尾に唐僧西遊記といふ外題が掲げてある所に一致させるに、萬曆を下らぬものとして見ねばならぬ。さもなく曲譜等の西遊記を吳昌齡作でないとするに、吳昌齡の西天取經にもざれ丈の種子が蒔かれてゐたか分明せぬ。やつぱりいきなり吳承恩西遊記にぶつかつて、宋の詩話では小兒を救つてやつた三藏が、其の報いにか小兒になつて別の和尚に救はれたその變化に驚く外はない。

加之曩の江流記はその流通の狀態がかなり古いらしく想像された外、話の中で老漢が夫妻の憂をたち聽く條なきは全く吳承恩にはない所で、寧ろ合汗衫の因果關係を暗示される。從て江流記は先づ吳承恩以前に相應流行したものを、彼が之を併合して西遊記を更に膨脹させたを見るか、少くとも宋の詩話以後吳承恩までの何人か院本の作者にまれ、吳昌齡にまれ、がかう云ふ勞を惜まなかつたものと考へてもよからうと思ふ現存の斷片的材料からでは、此れ以上の結論を造るにこが許されないが、さもなく民族傳説が混入して行く過程の大體だけは髣髴し得ようと思ふ。若し夫れ最後の西遊記の棄兒と最初の慈恩傳の生ひ立ちとを對比したなら、玄奘の俗姓が陳であり、棄兒の親 陳光蕊と云つたといふ果敢ない絲がか細く結べるに過ぎない。